2
FEBRUARY
2013
NO.42

マレーシアがもっと好きになる
ライフスタイルマガジン

セニョーム Senyum

毎月5日発行
FREE



特集

マレー伝統芸能の世界

フードレビュー

茶王之家
特製の「マグロ刺身イーサン」

極楽らーめん
全メニューをリニューアル。宇都宮餃子も登場

POCO HOMEMADE cafe & atelier
ほっこり幸せな気分になる隠れカフェ

タウンガイド

ペナン編

新コーナー「ぺなんのーと」
街で見つけたステキなもの、旬なものをお届けします

2013年2月5日発行 42号（毎月1回5日発行） KDN No. PP 16491/06/2013 (032264)

マレー伝統芸能の世界

ときにはコミカルに、ときにはロマンティックに演じられるマレー伝統芸能。インドネシアやタイ、アラブやポルトガルなどさまざまな異国文化の影響を受けて発展してきた、その成り立ちや意味を少しでも知っていると、理解が深まりより楽しめます。最近では、影絵芝居の物語に携帯電話が登場したり、ポップソングが使われたりという新しい流れも。さあ、奥深いマレー伝統芸能の世界に出かけましょう。







文・写真 上原亜季

（上）Wayang Kulit Gedek：マレーシアのイスラム社会に合わせてデザインされた人形。色鮮やかな影が特徴。（右下）Wayang Kulit Gedek：道化エトンとパッタムがカラオケを歌うシーン。
（左下）神々の一人、道化アイトとスニマン・ヌヌイ、マレーの衣装クバヤを着たムスリム女性。

ワヤン・クリッ Wayang Kulit

一人で30役を演じる人形遣いが織り成す影絵芝居

昼間の暑い太陽を忘れるような夜が幕を開けると、スクリーンの明かりが点くのは今かと心待ちにするこどもたちがザワザワと集まってきます。スクリーンの裏側では、「ダラン」と呼ばれる人形遣いが今宵登場する人形を確認しながら並べたり、楽器の調子を整えたりする一座のおじさんたちがタバコの煙を燻らせながら談笑しています。太鼓が打ち鳴らされ、ひとたびスクリーンに人形の影が映し出されると、一瞬にして光と影の世界に引き込まれるのです。

「ワヤン・クリッ」とは、マレーシア、インドネシア地域で広く発達した影絵芝居。水牛やヤギの皮で作られた人形には繊細な透かし彫りと彩色が施され、白い幕に投影された影は観るものを魅了します。地域ごとに特色があり、人形の姿も異なります。

かつて、マレーシアのワヤンは農村の生活に密着し、儀礼や結婚式での上演のほか、娯楽として農閑期には連夜物語が続いたといいます。そこで、こどもたちは道徳的なことを学び、大人たちもユーモアと風刺を交えて語られる社会情勢についての話を楽しみにしたそうです。

しかし、テレビや映画、インターネットが生活の中心になった今となっては、それも昔のこと。ワヤンを演じるグループも減り、現在は、主に文化的なイベントや政府主催の観光キャンペーンなどで演じられています。

上演の際は、白い大きなスクリーンの後ろに一人のダラン（人形遣い）が座り、物語に登場する人形20から30体ほどを一人で操ります。ダランは、神々、王子と姫、従者である道化たち、動物など、それぞれのキャラクターに合わせて声色を変えながら、即興でセリフを語り、物語を展開します。ダランの後ろには、人形の動きやシーンに合わせて音楽を演奏する7～8名から成る楽団が座っています。

ポップソングも登場 社会に合わせ変容するワヤン

マレーシアには、4種類のワヤンがありましたが、現在でも演じられているのは、タイ南部とクランタン州で発展した「ワヤン・クリッ・シアム（Siam）」（「ワヤン・クリッ・クランタン」と言われることもあります。表紙写真参照）と、ケダ州の「ワヤン・クリッ・ゲデッ（Gedek）」の2種類です。マレーシアでワヤンというと、前者を指すことが多いのですが、今回は、ワヤン・クリッ・ゲデッについて少しお話ししましょう。

「ふぉわっはっはっはっは～」。

一度観たことがある人は、この道化の笑い声を聞けば、ワヤン・クリッ・ゲデッで唯一活動を続ける一座「スリ・アスン（Seri Asun）」のダラン、マジッドさんだとすぐに分かるでしょう。

このワヤンは、タイ南部のナン・タルン（Nang Talung）という影絵芝居に由来し、かつてはインドの叙事詩ラーマヤナを基にした物語や、宮廷を舞台とした伝説などが演じられました。今日マレーシアでは、社会問題や流行のポップソングなどを取り入れながら、当地に伝わる物語が描かれます。

色鮮やかな影がスクリーンに投影される人形の特徴を残しつつ、マレーシアのイスラム社会に合わせて、頭にスカーフを巻いた女の子の人形を作るなど、人形のデザインも、キャラクターも少しずつ変化してきました。

お話の中心は、道化のエトンとパッタム。彼らはハーレーに乗ってスピード違反で捕まり、警官に「おい、お前たちどこから来て、どこへ行くんだ？」と聞かれれば、「後ろから来て、前に行くんだ！」と答えてみたり、二人でボケとツッコミを繰り返しながら物語が進みます。現代風に、携帯電話を片手に相方を呼び出したり、二人でカラオケを歌ったりするたびに、会場のこどもたちも、大人たちも大笑い。みんなその世界に飲み込まれてしまいます。

そんなワヤン・クリッが演じられる機会は、とても限られていますが、チャンスがあれば、ぜひのぞいてみてください。息を吹き込まれた人形の姿に、ふと時間を忘れて魅入ってしまうことでしょう。



Wayang Kulit Seri Asun の小さな芝居小屋の中の様子。人形遣いを囲むように左右と頭上に人形が並べられます。（左下）一人のダランがスクリーン前に座り、物語に登場する全ての人形を操ります。ダランの後ろに楽団が座ります。

公演を見られる施設

1. マレーシア・ツーリズムセンター Malaysia Tourism Centre (MTC)
年間を通して、週4回、マレーシアの音楽や伝統舞踊などの「カルチャーショー」を鑑賞することができる。45分ほどのステージで見応えもあるので、日本から来馬中のお友達を案内するのにも最適。
109, Jalan Ampang, 50450 KL　Tel: 03-9235 4848
入場料：大人RM5、こども（12歳以下）無料

2. ソンケット・レストラン（Songket Restaurant）
店名のとおりソンケット織りの布をふんだんに使ったセンスのよい雰囲気の店内で、料理と伝統芸能を楽しめる。ディナー時には、マレーだけでなく、インドや中国などの伝統的なダンスも鑑賞できる（日曜を除く）。
No. 29, Jalan Yap Kwan Seng, 50450 KL　Tel:03-2161 3331

3. クランタン文化センター 写真 ①②（Gelanggan Seni, Kelantan）
コタバル市の中心部にあり、影絵芝居「ワヤン・クリッ」や、大きく色彩豊かなマレー凧「ワウ・ブラン」、巨大な太鼓「レバナ・ウビ」など、クランタン州の伝統文化に触れることができる。影絵や伝統音楽の
Jalan Mahmud, Kota Bharu, 15000 Kelantan　Tel: 09-748 5534
入場料：無料　公演は、月・水・土曜のみ

4. サラワク・カルチュラル・ビレッジ 写真 ③（Sarawak Cultural Village）
サラワク州の代表的な7つの民族の住居や文化を紹介するテーマパーク。各民族の伝統工芸や生活様式、伝統楽器や踊りを観たり、体験したりできる。一日2回、民族舞踊ショーを上演している。
Pantai Damai, Santubong, 93752 Kuching, Sarawak
入場料：大人RM60、こども（6～12歳）RM30　Tel: 082-846 108


①


②


③

マッヨン
Mak Yong
ユネスコ無形文化遺産の華やかな歌謡劇

マレーシアの文化紹介などで、きらびやかな衣装に頭飾りをした15名ほどの女性たちが一方向を向いて踊っている写真を見たことがあるかもしれません。2005年にユネスコの無形文化遺産に登録されたマレーシアの歌舞劇「Mak Yong（マッヨン）」です。これは、歌、踊り、音楽やセリフ、そして儀礼など、さまざまなマレー文化の要素が凝縮された伝統芸能の一つです。

かつて、マッヨンは大衆芸能としてクランタン州を中心にトレンガヌ州、そして南部タイのパタニ地方の農村で娯楽や治療行為を目的に演じられていました。20世紀初頭、クランタンの王宮で擁護された時期もありましたが、長くは続きませんでした。その当時は、衣装も今ほど華美ではなく、村人の生活に根ざした芸能でした。しかし、社会的、宗教的理由でクランタン州でも演じるグループが減り、クアラルンプールのような都会で保存継承のために演じられるようになると、よりモダンな要素も取り込まれ、今日のような華やかな衣装を身にまとう、様式的な歌舞劇へと変化してきました。

物語は、クランタンやパタニ地方のマレーの伝説や神話に基づき、神々や宮廷人、伝説上の王子、道化などが登場します。

主役の一人、王様パッヨン（Pakyung）と踊り子たちが、この歌舞劇でとても大切なマレーの伝統的な弦楽器「ルバブ」に向かって敬意を表しながら歌う独特な掛け合いの歌と象徴的な踊り（Menghadap Rebab）。マレーの太鼓「グンダン」や、銅鑼「トウタワッ」。劇中に登場するパッヨンと道化たちの非常に強いクランタンの方言でテンポよく語られるセリフ。インド舞踊に由来するとも言われる踊りの手の動き。言葉が理解できなくても、注目する点はたくさんあります。特徴的な道化たちの表情やコミカルな動きを見ているだけで思わず笑い出してしまいます。

Mak Yongのなかで最も重要な楽器「ルバブ」。超自然的な意味をもつともいわれ、人の声にも似た魅惑的な音が役者たちの歌をリードします。

Mak Yongの最初に踊られる大切な踊り"Menghadap Rebab"の様子。現在、マッヨンの役者のなかで最も注目されているRosnan Rahman氏（写真中央）がパッヨンを演じている。
（写真：Zamree Salleh）

ガムラン・ムラユ
Gamelan Melayu
宮廷音楽として発達した雅な響き

ガムランの演奏を間近で見ると、ビリビリと空気の震えが伝わってきます。大きな銅鑼（ゴング）の音は、地面を張ってお腹に響くような重みのあるものです。ガムランは、「日本の音」とはまったく異なる世界観をもちながら、そのメロディーにどこか懐かしさも感じられます。大小さまざまな大きさの青銅のゴングや鍵盤楽器、木琴そして太鼓などの楽器から成るマレーシアのガムランは、甘く、ゆったりとした響きが特徴です。

現在では、踊りと一緒に演じられる機会が少なくなりましたが、元々は、宮廷の娯楽として擁護され、ガムラン演奏に合わせて女性たちが踊るものでした。

19世紀初頭、マレー半島南部沖合に位置したリアウ・リンガ王国（現・インドネシア領）の王家とパハン王家に仕える臣下の間で婚姻関係が結ばれた際に、踊り子と共にガムランの楽器がパハンの王宮に持ち込まれました。20世紀初頭には、パハンの王宮からトレンガヌの王宮へと伝わり、宮廷音楽として発展。その間、少しずつ楽器編成や音階、メロディー、そして踊りの動きや衣装などがマレー特有の形に変化し、「ガムラン・ムラユ」あるいは「ジョゲッ・ガムラン」と呼ばれるようになりました。

当時の楽器の一部は、現在、パハン州プカンにあるスルタン・アブ・バカー博物館に展示されています。1950年代から60年代のマレー映画黄金期の作品のなかに登場する宮廷のシーンなどでも、その踊りの様子とガムラン演奏を観ることができます。

第二次世界大戦中、ガムランも一時衰退しますが、1960年代以降は、宮廷ではなく、大学や国立芸術アカデミーなどの教育機関や文化施設で演奏されるようになりました。大学のキャンパスを歩いていると、遠くからガムランの音が聴こえてくることがあります。様々なイベントやマレーの結婚式などで演奏をみかけた方もいるかもしれませんね。

多民族国家マレーシアを象徴するように、中華系の太鼓やインド系の太鼓・タブラを取り入れるなど、コンテンポラリーな楽曲を多く演奏する「Rhythm in Bronze（リズム・イン・ブロンズ）」のような、エンターテイメント性に富んだステージを展開するガムラングループも出てきています。生演奏をみられる機会は少ないかもしれませんが、チャンスがあれば、その独特な楽器の響きに耳を傾けてみてください。


Universiti Sains Malaysia が所有するガムラン・ムラユのセット


（写真：Zamree Salleh）
Mak Yong：籐のお仕置き棒（Rotan berai）を手にしたパッヨンが、2人の道化 Peran Tua と Peran Muda を制する。


マレー舞踊の一つ「ザピン」を踊るこどもたち。

マレー民謡ムジクアスリ
Muzik Asli
西洋やアラブの影響を受けた陽気な舞踊

明るいカラフルな衣装を着た男女が、アコーディオンやバイオリンの音楽に合わせて笑顔でステップを踏む。思わず、こちらも胸が高鳴ります。

マレーの舞踊とその伴奏の音楽であるマレー民謡（Muzik Asli）は、マレーシアの歴史のなかで、アラブやポルトガルなど多様な文化の影響を受け、それらを融合させながら形づくられてきました。舞踊とその音楽には、大きく分けて「ザピン（Zapin）」、「ジョゲッ（Joget）」、「イナン（Inang）」、「アスリ（Asli）」の4種類あります。それぞれ決まった太鼓のリズムがあり、踊りのステップも異なります。今に残るマレー民謡の曲の数々は、19世紀の終わりから20世紀初頭にかけて、西洋の影響を受けて盛んに演じられたマレー・オペラ「バンサワン（Bangsawan）」の劇中で演奏されたものです。

例えば、「ザピン」はメロディーを聞くと、その音階からアラブの影響を強く受けていることがよく分かります。ザピンは、マレー半島南部のジョホール州でとても人気があり、学校や大学対抗のコンテストも開催されています。

マレー民謡は、アコーディオンやバイオリン、フルートなどの西洋楽器と、マレーのフレームドラム「ルバナ」や銅鑼（ゴング）が用いられることで、日本人にとっても慣れ親しんだ音でありながら、マレーのメロディーやリズムが独特の音楽をつくり出しています。

マレーの舞踊は、日常の儀礼などと結びつくことはほとんどなく、鑑賞を目的に踊られることが多いため、とても明るく、華やかであることが特徴です。

●上原 亜季
ムティアラ・アーツ・プロダクション代表。Universiti Sains Malaysia にてマレーシアの伝統芸能について 研究後、東南アジア芸能コーディネーターとして活動。マレー 語通訳・翻訳家兼ガムラン奏者。